[illegible]

上作四[illegible]物[illegible]是新一[illegible]

八角有餘宗長

富士歴覧記

入道中納言雅康卿

明應八年五月三日富士歴覧乃為発足新宅おりひ立
伊豆国江州柏木にゆりて四日に胡[illegible]
侍りに社頭と申[illegible]
[illegible]
内白川外白川きの小乃面[illegible]
[illegible]
[illegible]
山中とゆ[illegible]
[illegible]

関民部大輔盛貞主所ゆつさて先立而乃寺まゑ後ゆとけ
ゆてり今東ゑこゆやめけまくらし後夜ゆりとくちゑこ
仰りく

秋ゆと思ゑこゆつやゆまゆてあやめ花ゑりしくゑを
廿日雨ゆらゆとて遠面し仰わしに民部大輔乃ゆとより
ゆこてとゑ仰まつ

みやこ人ゑ乃ゆ新ゆ梅ゑ花里に面ゑりし多
遠し

五月雨ゆ心あゆけまあゆやゆ寺ゆしあくゑこの夜は
八日宿所ゆ後ゆまて哥まゆ張行し仰りしに十五ゑれ

題ゑこゆて初春

道ゑ世ゑて世ゑ後つゆゑこゆ乃ゆ新ゑ
柳風

これゆゆ八ゆゑ後ゆゑこゆ風ゆ胡つゆ乃ゆ乃ゆ
秋田

ゑ仰ゆ神ゆ思ゑ仰ゆ面ゆしゆゑこゑ後ゑ
遠憲

横乃ゆ数ゆゆゆ思ゆゑゆてゆけゆの上ゆ後ゆ
松

名ゆ思ゑ人ゑ仰ゆ乃ゆ面ゑ乃ゆゆ乃ゆ代乃ゆ

代官所の役人どもいとゝ地十三百國府使渡入道誠恭上洛
ゆゑ[illegible]あり一筋乃中ゝ

郭公

ゆこゝろ[illegible]なき[illegible]年小松くよ涼さを[illegible]

納涼

[illegible]

恨恋

[illegible]

十六日太神宮の代宮の人をゆこゝをけるゝ[illegible]
[illegible]

[illegible]

十七日尾州大野より[illegible]
[illegible]に伊豆名早雲菴(ナイ)
所に[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

今[illegible]

十八日[illegible]邪緒川水野[illegible]
[illegible]

中けさ心ちつゝ同様にて行る数日の間様々
乃興遊あり女首にて行る西小山震
去にかゝれてくれ人のまれなるの公家もひん

旅

京伊くら家成る夫婦のやとに泊りてたること
有

祝

きくもむる新れ要をいるのすゝ枝れ家さへ
年かは乃切を風成て行ま又各二首れ寄よと行は

夏月

胡ほ乃延月ゝ蔵ゝ加地友行の用

祝言

松乃うへよりあそぶの伊人形ひとの国未ひけ
十九日八ぼを見に人くさそいまかとて行きさ
とよしくまかりあれそれ形とにくることを
も心うつくしくみも行すかてなるゝ行てよれ
かけるさ乃神を行ふれ八ゝと書てみすくもて
ゆう分
ゆさわに延八馬分るまゝ円形と七十ら地獄をれ

杜若みるゝ乃ぬてひゝさ形の一とゝ乃ゝる形あるとは
丈四日をいのより舟ま宮三河へ行行よ風のゝ乃て
くま出ゝ海を行るに有れ形よてをにゝるみるとゝ

国立公文書館
National Archives of Japan

今こそとりわきてに侍らやほりあへ人へ母とは出なり
六月一日二橋のさとは成就ぬるり二村山のみねと
とふ成就けるまく橋もありあやにあしくとよめり
おもしろからずつくらねく
ともかくもうへとくるしもみたしらよやまとかうけすとこの所とも
ことをひて遠江国にしてさと竹梅村はつきて本興寺と云
法華堂にて一宿して御芳志のほどみなくをしつる
侍りけり
寺より夜もすがら浦の里をさして之は奥山説法の庭のなり
二日寺成ではく立そうと入ておとろを□まりへ侍らむとてく舟よせり

かとちとまきくにはまさいの鬼成をやりたる
いさゝかのほかさそえ物ともして我身をふかく袖にうちぬや
引馬の宿につきくあしたまた野のあまりとのよ海を
えい萩をさき秋はかなきも去ぬとや宿成門よの露
八日さ東の中山につきて侍る日坂といふ所をよりに入く
さとしくも越侍らむため
日乃坂をたくれぬるをわすれきを海よりさき東の中山
なまし家の傍に参り祖雅経卿の歌よめる里はいとく然
愛乃いみしさは今も物ともさいの中山とつくる後
古今集に入侍しさやを思ひいて

巻三百三十五

かくやあるとしかくれぬ美とちりとたひねえのさ秋の中山
九日さ夜の中山をてあもと一見れとも雲のくかくさ
あもりさうれんとゆらねさくはまれるくく一日也雨り
を秋雪ま十首詠ら
大かさいらくしかもりのそはてらえもあれかさ
きをれをかゆつさけのあくあもひと旅れ里にくみ見
雪れれをきとの秋りされもをしりるりよくくやも
らかさてかくあもあ人ふれとれれ不二の雪よと
ふれ秋とうあもとくれもるれと雪のつの添り
あもとふと雪れのとかれやをとうよくくさよ

きかくらゆとやこに雪あるもさやは思ふ秋の中山
郭公はの中山なくきりおよはなゆるん
空めとくちれを雪さもりあをたあさぬの白雪
あのひ雪れ沢よりの名やうあ
十三日初くはとちてのあり中ふ右京姫立寄て
あ家はの富士有明月ちまは
よと雲れるまの里とくとくきそくくるよあの曙
十四日ふはら坂とみくくちる
酒見坂くろひれ雪をもてとち都とりまをさを
おひの雲原とは不ま忘の屋とて

むし一雁志の書くらう法人の問ふ事あるきうけん
やくれのことなきをうらやまして
あの梅やおさしもつぶの乃ひてさみく屋ひとつ里ともて見
十七日又こゝの方の家方面不止宿ものやうあるを法
乃ひうくこもて侍ものも数日ちきうくゝとらうを
屋さうしぬくくさいたれたるかとくれ十
八日蹴鞠あり退留の猪楽ら下種くれ奥拍
ものを文二日二首の懐紙をとりかくて披講之

朝蟬

旅ものとなれもあり落ぬ婦人と夜けとはきもん

悲哀

さ我ぬこゝの涙のちぬ悲ものはちぬ悲ものをみて
道のを相傳し菊ら高みを見ものかゝみくは
うゝしきを

哭ぬうよ志思ものをとはそをもおもとを也

七月七日関民部文高不あく人く類をとくまて

七夕松

いと面くら今宵うゝして和歌をつゝしひとゆるゝ行後

惜月

なを思ぬ花と人をもかゝ陰をとゝをくゝ月ものを

寄露恋

我命きえしすゑはあらしとも行て手向とらん露の契りを

述懐

なかりかあはれ述しへあかまて梅のものせらす也一中もまう

いまは都小中納言入道宗世にゆかしうこえすなるおもひ下

思ふ侍らしさこえくしかくて侍従大納言實隆卿申つる

それ迄計なる

あえはまことにいま思ひ會ひ河乃山ちよさこ蔦をたえむかも

返し

今は海こ夏のひかりなるあらまし我つくまて返しは宇津の山越

これもむかし曩祖雅経卿の時にや侍らんそのかみ給ひ

しに宇津の山にて路引着く夏うつの山おもしろ

きみをぬつらぬ下をとくえてもて又雅世卿この山を

ふみ侍りしに雅経の形をみゆりひしく侍りて

いとゞふかうこそおもひしうつの山にて世の中に蔦の

ほかにはらぬ侍よりしをとしたに見ぬ

こゝに見侍なりし

宗祇法師まちつゐてとりふまをこすのたにもまちかもうけ

ける返し侍りうへくよみてつかはしきる

かくなからのかくてやなとはれなくとも身のなかきをとへ

日本政府図書

ゐへし
せきもいまは川のうへの桐もたちぬるの末をはすてまつやこゝろに
三井寺のかくれとむかしよりとゝめ人なる人のなかのきにはまる
このみちも我ら二方をことにおもふ所あるへき二の世をまもるかみ
こゝのへ十
あしはやまをこえをはとをいさゝかもあをきまつのいろそのまゝよみゆき

群書類従巻第三百三十五

国立公文書館
National Archives of Japan